

# 山と博物館

第32巻 第5号

1987年5月25日

大町山岳博物館



チベット・ヤンパチエン高原の遊牧民 (撮影 山崎佐喜治)

## 岳人の国際友好協定

本年四月二十九日、中国西藏自治区(チベット)の拉萨市に於て、長野県山岳協会と、西藏登山協会とが友好兄弟山岳協会の調印を行い、友好結成をした。友好姉妹都市というのはよく耳なれていても、岳人の友好協定というのはあまり例のない事だけに、珍しさもあるが未永く続いてほしいものだ。

曰く、「信濃の国は十州に境つらぬる国にして、そびゆる山はいや高く、流るる川はいや遠し」。日本の屋根長野県に住み、愛し、より厳しい登山に憧れる長野県の岳人。「ここぞ高き雪山の中心、世界の大河の源泉なり、わが西藏はひとときは高く、この世の清浄の地なり」。世界の屋根西藏に住み、祖国を愛し、地上の最高峰に挑む西藏の岳人。双方の岳人は、日本・中国合同の登山技術研修に会し、共に日本・中国の岩山を攀じ氷雪の山に挑み、登山史上に輝く友誼を昇華させた。両国の登山協会の協力と交流はさらに高まり、日・中国岳人のこの仕事は世界の登山文化向上に限りない貢献をしようとしている。長野県の岳人と西藏の岳人の友誼は永遠のものでなければならぬ。

私もこの度の調印団の一員として同行し、チベットの岳人たちと親しく語りあう機会を得た。多くの先輩たちが積み上げた数々の友好と、岳人としての登山技術研修の交流が、実を結んでの総仕上げの様なものであったが、実際現地を訪れて見て、これがまた新たな出発点でなければならぬと痛感した。

それは単に山男同士の感傷のモニユメントではなく、山を離れて更に多くの人と人との交わり、文化や芸術、教育や精神の諸々の問題を通じて学びあう交流の証でなくてはならないと思えたからである。

山を通じて得た岳人の友好が世界をめぐり、永遠の平和の絆が幾重にも結ばれて、国境のない「人類皆家族」の日々が早く来る事を祈るものだ。

(大町山岳博物館嘱託員 山崎佐喜治)

# 秘境・チベット紀行

## —私の見た高地民族—

山崎 佐喜治

はじめに

チベットと言えば一般的には中国西藏自治区(中国の中の一つの省に当たる)を指すようだが、チベット人とその文化ということになればアジアのかなり広い地域に分布しているようである。私はその中の首都ラサ市とその周辺の高原をかいま見たに過ぎないが、話の都合で全体についてもふれたいのでお許しを得たい。

現在西藏自治区全体の人口は約二百万人で中国全体の〇・一八%だが、面積は中国全土の一二%に当たる。人種はチベット人の他ネパール人、モウコ人、漢族等が入って文化の



チヨカン(大昭寺)前で五体投地する巡礼たち

増城にもなっている。

ラサ(ラ薩)市は人口約二〇万、中央チベットにある首都で行政・文化・経済の中心。西藏自治区人民政府がおかれている。海拔三千七百米、ラサ川の中流の南北五キロ、東西十キロ位の横に長い盆地の中央にあり、冬でも雪はそんなには積もらないという。商業は盛んであるが、工業は繊維・食品・木工品・自動車機械修理等で、製造・化学工業等は少なく、寺とその門前町といった消費型の都市である。

歴史的には七世紀初頭、諸族を統一し、後の吐蕃国の基礎を成したソンツェン・ガンポが、ネパール王息女ティツンや唐・太宗の息女文成公主を娶り、チベット文字を制定したり、仏教式の法律を定めるなど法王として君臨したことが知られている。人民もそれをも誇りにしているようだ。以後歴代ダライ・ラマの鎮国統治する秘境となり、一九六五年チベット自治区発足まで続いた。現代ダライ・ラマ一四世はインドに亡命中で宮殿は人民に解放されている。

気候と風土

年間日照時間は三千時間といわれ「太陽の町」の異称がある位だが寒暖の日較差の激しい所だ。五月初めでも前の山が雪で白くなつたかと思えば、翌日は全部融けて赤茶色の岩山に成っており、車で走っても晴れているかと思えば雪や雹になり、盆地から見ると谷も或



ポダラ宮殿(歴代ダライ・ラマの居城であった)

の集落をつくり寄り添って暮らす。遊牧民のヤクの毛で織った黒いテントは川の縁に見られる。

平地の向こうにすぐ急峻な山が迫り、その中腹には直登した踏み跡がみられ、遊牧民の足の強さに感心させられる。山肌は茶褐色ないし黄土色で、草も殆ど無いまま頂きに雪を置くものも多い。その奥には六千米級の山の氷河が見え隠れする。その雪解け水で谷が潤い川ができ、僅かな草原をつくっているのである。

宗教と文化

チベットの政治と文化は仏教と切り離せない。歴代ダライ・ラマは、政治の王でありチベット仏教の生き仏として最高の位置にあった。従って中国政府による解放の折しも、王と生き仏を抜きにした人民政府など考えられなかったのではあるまいか。

町でも村でも、民家の屋根という屋根にはタルチヨと呼ぶ赤・黄・緑の折りの旗がたなびき、橋や丘の頂きまで翻っている。仏教は完全に生活の一部なのである。

かつてラマ教とかチベット密教とか呼ばれていたものを統一して今はチベット仏教と呼ぶようだが、日本の仏教より色彩が明るく艶やかで、よりインド仏教に近いというが、中国を経て来た時、中国人の好みで切り捨てられた部分があるのだろう。

チヨカン(大昭寺)はラサの街の中央にあつてチベット仏教の中心的存在だが、入口で五体投地して祈る巡礼の姿には圧倒される。この寺を目指して恐ろしい数の巡礼が集まつて来る。長旅の者は数ヶ月をかけ、引き連れた羊を途中で売っては宿代にして来るのだという。彼等にとって聖地ラサ参りは極楽浄土

る谷は晴れその横は雪と言つた具合で、気象変化もまた激しい所だ。

緯度は沖繩と同じだから日も長く日照も強いはずだが、三千七百米にあつて乾燥地の為、酸素は薄く周囲の山は何も無い秃山で、平地も四月に芽吹く柳の類の他常緑樹は全く無い。冬は白い雪と灰色のみの世界だ。その雪がゆっくり融けて下流の地域をまた潤すのだ。

ただ空気が乾燥し公害も無いので、空は底抜けに明るく深い青である。ラサ地方では七月に九月に千ミリ程の降雨があり、比較的豊かな耕地が発達している。しかし北西部に向かう程雨も少なく高地化し、牧草も減つて小動物さえ激減する。植物が少ないため、雨列や山陵からの崩落が荒々しく、地表を覆うものの無い痛ましさを呈する。川の水は澄み、人々は谷の入り口の清水の得られる所に平屋建

への旅かもしれない。

チヨカンの周囲は八角街と呼ばれ、バルコ  
ルという街路が寺を一周し、その両側は毎日  
バザールで大盛況。あらゆる生活用品や土産  
物が売られ、国際見本市の様相だ。ラサ滞  
中毎日のように訪れたが、退屈しなかった。

肉を裂いて売っているかと思えば横でうすや  
きのようなパンを売り、その横でチベタン  
シューズや絨織を売り、またその横で高価な  
水差しや洒落たラッパを売っている。すべて  
が珍しかった。

寺は市の北の岩山の下にセラ寺、西外れに  
デブン寺、そして今はなきガンデン寺、文革  
で破壊されたラモチエ寺など数多く、巨大な  
僧院でもあって、ラサはかつては仏教文化の  
一大教育都市でもあったのだ。

市の中央やや西に赤山と呼ばれる丘があり、  
その上にとつかりとラサの顔・ポダラ宮殿が  
ある。全くあつらえむきの丘だ。歴代ダライ  
・ラマの居城ポダラ宮殿はいつも燦然と輝い  
ており、九百九十の部屋があるという広大な  
ピルの塊のような建物だが、何処から見ても  
絵になる美しい造りだ。空気の薄いラサでは  
高所障害が出やすいので、ポダラ見学はとり  
わけ後にまわされる所だ。城壁の坂を登り、  
回廊をぐるぐる回り、金色の仏で充たされバ  
ター蠟燭の臭いにもせかえる暗い小部屋を巡  
って屋上に立つと、金色の尖塔が澄み切った  
紺碧の空にまぶしい。

ここから見る白峰に囲まれたラサ盆地は正  
に地上の楽園だ。世界の雑踏から全く隔離さ  
れた別天地、極楽浄土だと思えてきた。成都  
を発って空路を西へ取ると、雪また雪の山。  
どこに落ちてても、もう助からないと思つたそ  
の末に辿り着いたラサ。そしてその西にはま

た延々とコンロンの向こうまでチャンタン高  
原が広がっていて、およそ人の住む所ではな  
いのである。こんな地で、神・仏を信じない  
で何をよりどころに生きるのか。文化も全て  
そこから発して当然のように思えてきた。

ラサ市内には小・中学校がそれぞれ数校あ  
り、ラサホテルの前にも第七中学が鉄筋で建  
設中だった。その他市内には師範学校と医科  
大学が一つずつあるようだ。

教育

四月の末の午後、ラサ第一中学を見学に行  
った。門をくぐったが生徒がいない。職員室  
に行くのと午後四時半に来るように言われ出直  
す。五時過ぎ、高一クラスの化学と高二のチ  
ベット語の授業を参観。中学は日本の中・高  
校と一緒にした学齢で、内容も意外と高度で  
感心させられた。午前中三時間、その後家に

帰り四時過ぎ再登校して午後三時間、四十五  
分授業で行っている。(北京標準時で、日没  
は十時近く日は長いので昼寝をさせるのかと  
も思う。)暗い教室で正面に黒板だけがあり、  
木の古い机で生徒たちは真剣にノートをとつ  
ていた。

休み時間には、女の子たちは校庭の木陰で  
ゴム飛びをして遊んだり、卓球台でピンポン  
をしていた。近くの庭にはバスケットのコー  
トが何面もあった。生徒たちは我々の突然の  
訪問にも笑顔で迎え、別れには手を振って別  
れを惜しんでくれる人なつこい子供たちであ  
った。帰りに街の本屋で物理の参考書を八十  
円程で買った。北京で発行された中国語のも  
ので、日本の戦後間もない時のものに似てい  
た。

後日、放牧民の部落に向う途中 田舎の集  
落のはずれに分教場があり、そこにも一対の  
バスケットゴールがあった。貧しくても教育  
熱心な国民である。

ラサホテルの前には立派な文化ホール(西  
蔵区劇場)があり、時々催し物があるようだ。  
市の南部ラサ川の近くに西藏自治区体育館と  
いうこれも立派な大体育館があり、その奥の  
シャンデリアと豪華な壁画のある一室で我々  
は調印式を行った。中国への解放の折、文  
化面で一大躍進をはかったようだ。

農業と放牧

ラサから北西に百数十キロ、ヤンパチエン  
高原を北上して、秀峰ニンチェン・タンガ  
(七〇八八米)の麓までトレッキングをして  
みた。国道と思える主要道であったが、すれ  
違うのは国防色の軍の車と輸送用のトラック  
だけだった。農民で車を持っている者は少な  
い。



標高 4.000m の高原の農民の家の内部

農家の造りは、白いシツクイで固めた土造  
りの平屋建。一人当たり一―二坪程度の広さ  
で土間である。木の戸をあけて入ると、中央  
に長四角のかまどがあり、煙突がついていて  
暖房も兼ねているようだ。ヤクの糞を乾燥さ  
せたものが燃料だ。家の周囲に高さ二米位の  
白い土塀の囲いがあり、その中で家畜の山羊  
や羊、ヤク等飼っている。日本のように湿度  
の高い国では家の土台を高くして通気を良く  
しているが、乾燥し寒暖の激しいチベットで  
は大地に這いつくばるようにして住む方が住  
みやすいのである。

街道沿いの家には電気が引かれているが、  
少し谷を入る部落ではヤクの油で作ったパタ  
ーロウソクを灯している。  
主食は青麦を煎って粉にしたものを、パタ





2頭だてのヤクが麦畑でスキを引く

長野県田川高等学校教諭  
長野県山岳協会自然保護委員長

「茶で溶いて丸めたツアンパと言うだんごのようなもの。バター茶は直径二〇cm位の木の筒にお茶、塩、バターを加え攪拌して作る。乾燥しているから日に何度となくよく飲む。また青麦から造ったチヤンという酒もよく飲まれる。薄黄緑色でヨーグルトを日本酒でといた感じで実に口あたりのいいものだ。ポリタンに入れてどこにでも持ち歩いている。麦は冬蒔きと春蒔きがあり、五月初め、赤く美しく飾った二頭立てのヤクにすきを着け、女たちも着飾って、口笛を吹き歌を唄って晴れがましく麦蒔きをしていた。まるで田植え祭りようだ。豊作祈願でもあろうか。遠い地に来て、山の雪解けや農耕の様を見ている、少し昔の白馬山麓の村々をなつかしく思い浮かべていた。人間が厳しい条件の中で生きる智慧には共通するものがあるのであるともかく愛すべき人たちであった。

# 飛騨の国の白いコウモリ(2)

## 宮尾嶽雄

尾張藩士、水谷豊文(二七九—一八三三)は、小野蘭山(京都)に本草学を学び、野村立栄(名古屋)について蘭学をも修めている。文政九年(一八二六)には、江戸参府途上のシーボルトを、伊藤圭介(一八〇三—一九〇一)らと共に熱田に迎え、植物標本などを見せてシーボルトを驚かせるほどの逸材であった。彼の代表的な著作「物品識名」は、動植物、鉱物の和漢名を集めた事典ともいえるべきもので、文化六年(一八〇九)に名古屋の永楽堂から刊行されている。そこで彼は、「カウモリ、カクヒドリ、伏翼、尿を夜明砂」と云々と記載している。「夜明砂」とあるのは、「天鼠尿」となっている。「本草綱目」では「鼠法、石肝、夜明砂、黒砂星」などの名称も挙げ、次のように記されている。「これを採取したならば、水で灰土、悪氣を洩り去り、細砂を取って晒し乾して焙じて用いる。その砂はすなわち蚊蚋の眼である」これの処法や効能についても多くの記述がある。

が国にもたらされているようである。この書物は、わが国の本草学に著しい影響を与え、以後わが国の本草書は、殆ど全く、「本草綱目」の引き写しであったという方が正しいであらう。

ここで問題にしたいのは、水谷豊文ほどの学者にして尚且つ、コウモリを「禽」の部に分類している点である。寺島良安の「和漢三才図会」(一七一一)でも同様である。

中国では、五〇〇年頃には集大成されていたといわれる「神農本草経」以来、コウモリは「禽」の部で扱われており、「本草綱目」でもまた、ムササビ類と共に禽の部に入れている。

李時珍は、コウモリについて、次のように解説している。「伏翼は形が鼠に似て灰黒色だ。薄い肉翅があり、四足及び尾を連合して一のようになっている。夏は出て冬は蟄し、日中は伏して夜間に飛び、蚊、蚋を食物とし、自ら能く発生し成育する。或は劫を経た鼠が変化して蝠となり、鼠も化して蝠となり、蝠がまた化して魁蛤(大きなハマグリ)となるというが、恐らくそうではない」

先に引用した朝日重章は、「鼠のなりたる



中国、明代末の本草家、李時珍(一五二三—一五九六)による「本草綱目」(一五九六年刊行という)は、一六〇六年にはわ

「にや」とつぶやいているが、これなども彼の素直な感想ではなく、当時の本草書に毒された知識のひけらかしであったように思われてならない。  
—おわり—  
(愛知学院大学歯学部教授)

### 博物館だより

友の会の会員を募集しています  
山岳博物館友の会は自然と親しみ自然を味わう人の集まりで、会員は現在200名です。  
次の事業を行います  
針ノ木自然観察会(6月)・手作りおもちゃと夏休み準備教室(7月)・高瀬溪谷自然観察(8月)・キノコ学習会(9月)・黒部溪谷探勝会(10月)・郷土料理講習会(11月)歩くスキーの会(2月)

次の特典があります  
●山岳博物館へ無料で入館できます●「山と博物館」、会の不定期報「ゆきつばき通信」、年報「ゆきつばき」が配布されます●博物館の施設・資料が利用できます  
入会金はいりません  
年会費として、お一人の場合3千500円、ご家族の場合一家族で4千円が必要です。  
詳しくは山岳博物館内友の会事務局へお問い合わせください。要項をお送りします。

山と博物館第32巻第5号  
一九八七年五月二十五日発行  
発行所 長野県大町市 TEL.0263-2211  
印刷所 長野県大町市後町 大町山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可  
郵便振替口座番号(長野四一)二二二九九三